

# 琵琶湖博だより

写真「鳥丸半島の鳥シリーズIII」  
カワウ



## 「海鳥の楽園」が支えるペルー農業

2011年の2月下旬から3月上旬にかけて、ペルーを訪問しました。7月から琵琶湖博物館で行われている企画展「こまった！カワウ」の資料収集のためです。琵琶湖のカワウは、食害をもたらしたり竹生島等の木を枯らしてしまう困った鳥になっています。しかし、人間に益を与える鳥として保護されてきた鵜の仲間もいます。その代表がペルー共和国の海岸部に生息するグアナイヒメウ (*Phalacrocorax bougainvillii*) です。

グアナイヒメウは、海岸部の岬や島に地上営巣する海鳥で、その糞は肥料としての効果があります。19世紀には欧州各国でも広く知られるようになり、ヒメウを含む海鳥の糞は「グアノ」の名称で大量に輸出されました。化学肥料の登場で輸出は廃れましたが、ペルーでは肥料価値が高くしかも安価であり、有機農業への関心の高まりもあって天然の良質な肥料として海鳥の糞は見直されているそうです。

ペルーでは、グアナイヒメウ・カツオドリ・ペリカンなどが鳥糞生産者として重視されており、それらが大量に繁殖する22の島と11の岬が保護区となっています。海鳥の楽園を守ることで、農業に必要な鳥糞の採取を維持することが保護区の役割です。そのなかから、コーレス岬とサンファン岬の2つの保護区を紹介します。

コーレス岬は、首都リマから遠く離れたチリ国境に近い砂漠のなかにある岬です(写真1)。近づくと、アンモニアの臭いが鼻をつきます。乾燥地帯の海鳥の糞は固く壁土のように白く固まって岬を覆っています。それをはぎ取り、人の手で砕いて肥料の袋に入れる作業が行われていました(写真2)。

もうひとつの訪問地、サンファン岬も砂漠のなかにあります。ここでは、糞の堆積が薄いため採取を休んでいました。かつては無尽蔵と思われていたペルー海岸部の海鳥の糞ですが、鳥の数が減ったため、鳥類の繁殖地を守りながら期間を決めて糞を採取するようになっています。エルニーニョ現象や漁業によって餌となるカタクチイワシが不足するようになったことが減少の要因とされています。ただ、海鳥の数は、今は増加傾向にあるとのことで、地上を埋め尽くすグアナイヒメウの大群に出会うことができました(写真3)。

今回の取材を通して印象深かったのは、水域から陸域へとモノを運ぶ鳥の働きと人との関係の複雑さです。この複雑さは時には厄介な事態をもたらしますが、この過程に介入し制御しようとするのも人です。むしろペルーと日本の琵琶湖とは条件が全く違います。自然は「いいとこ取り」ができないために、それぞれの地域の条件にあった生物との付き合い方が求められているようです。

熊本大学文学部総合人間学科 牧野厚史(元琵琶湖博物館学芸員)



写真1：コーレス岬の全景



写真2：鳥糞(グアノ)を採取するアンデスの人々



写真3：グアナイヒメウの群れ(サンファン岬)

# 田んぼの生きもの観察会

田んぼは、お米をつくるために私たち人間が作り上げた環境ですが、そこには長い稲作の歴史の中で多くの生きものがすみつくようになりました。田んぼは私たちにとって、生きものと身近に触れ合うことのできる水辺でもあるのです。

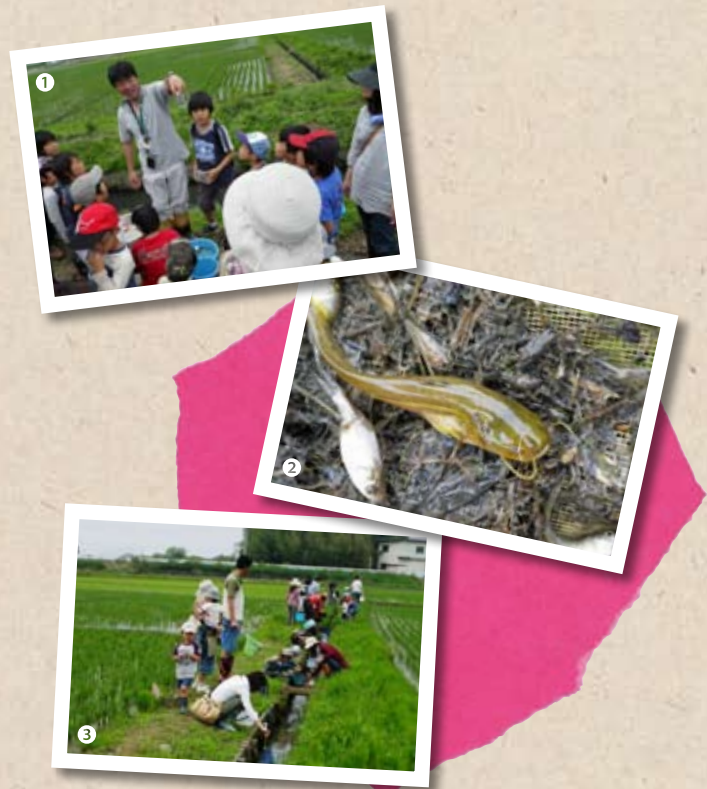
近年では県内の多くの場所で地域の人々が主体となって、田んぼの生きもの観察会が行なわれています。豊かな生命を育む田んぼのすばらしさを知ってもらう、さらには都市の人々との交流など目的は様々ですが、どの観察会も本物の生きものに触れ、その地域の生きものについて地元の講師の方々が詳しく教えてくれるなど魅力あるものとなっています。そのため、観察会では子どもだけでなく、大人も夢中になって生きものを追いかけています。

県内各地で行なわれている田んぼの生きもの観察会にお邪魔してみると、地域によって観察できる生きものが異なることに気が付きます。この違いこそが、それぞれの地域の特徴でもあり、地域の宝物を発見してもらえるきっかけになるのではないかと思います。

一方、田んぼで生きものを観察する人達も多種多様です。フナやナマズの稚魚を探す人、カエルの写真撮影をする人、畔に咲いている花を観察する人、プランクトンをじっと眺める人。それぞれ興味のある分野が異なっていると、それだけたくさんの宝物が見えてくるのも田んぼの生きもの観察の魅力です。

季節により景色の異なる田んぼ、見方を変えると別の世界が見えてくる田んぼ。そこには、まだまだたくさんの大発見が残されています。様々な楽しみ方ができて、生きている宝物達がすむ魅力ある田んぼへ、ぜひ皆さんも出かけてみてください。

(学芸員 金尾<sup>しげふみ</sup>滋史)



写真

- ① 田んぼの生きものに興味津津
- ② 見つかったナマズやフナの稚魚たち
- ③ 田んぼの排水路にも生きものたちが



## 【資料裏話 その1】 写真が語る「沖すくい網漁」

琵琶湖の漁業は、生業として値段のつく魚を工夫の上に漁獲され成り立っています。コアユを狙う「沖すくい網漁」は、舳先に乗ったすくい手が大きな手網ですくっていたものから、写真のように体を張って網を押し込んでいた通称ガチャンコを経て、今はひとりで機械操作を行うものへと変わっています。当時の様子は、写真にだけ残っています。

(専門学芸員 秋山廣光)

### 編集後記

カワウの糞の臭いではないですが、古くからくらしの中で様々な香りを使う習慣があります。新しくオープンした、羽田空港の国際線ターミナルにあるラウンジでは、日本をイメージしてもらうために、ヒノキなどの和の香りが漂うように演出されているそうです。認知症の改善にも、香りが役立つことが実証されているようです。

あなたにとって大切な香りは、どんな香りですか？(てら)

### ◆巻頭写真の説明

黒くて大きな水鳥、カワウは、日本に生息する4種のウの仲間の中で、唯一内陸部の湖沼や河川で普通に見られる鳥です。全身真っ黒ですが、ほおのあたりが白く、くちばしの根元は黄色です。眼は緑色をしています。カワウはペリカンの仲間ですが、この仲間の鳥に共通する特徴は足にあります。カモなどの水鳥は、三本の指の間に2つ水かきがあるのですが、ペリカンの仲間では、4本の指に3つ水かきがあるのです。

### 🕒 鳥の目 魚の目 クイズ 🕒

#### 「カワウについて」

Q カワウの足は、カモなど他の水鳥とはちがった形をしています。どんな形をしているでしょうか。

- ① 指に水かきが3つある
- ② 指が幅広く広がっている
- ③ 指が長くなっている

答えは、紙面のどこかにあります。